

## (書評) *Jesus Loves Japan*

Ikeuchi, Suma, *Jesus Loves Japan: Return Migration and Global Pentecostalism in a Brazilian Diaspora*  
(Stanford: Stanford University Press, 2019), 256p.

渡 会 環

### I. はじめに

本書は、プロテスタントのペンテコステ派に日本で改宗した日系ブラジル人が、信仰によって「デカセギ」と一般的に呼ばれるブラジルから日本への移住を自身で解釈する術を得てそれについて語る過程を、主として教会での参与観察と信者へのインタビューの結果をもとに描き出したものである。著者の池内は愛知県豊田市にある教会で参与観察を行い、さらに、複数の信者が居住したブラジル国籍の住民が多いことで知られる同市内の保見団地に住んだ。調査対象となった教会はブラジルのプロテスタントの宗派で、1993年に日本で新たに立ち上げられたものである。創設者は、日本にデカセギに来る前にブラジルで牧師をしていた。

池内は日系ブラジル人改宗者の経験を形作るものとして、「移動の道徳性 (morality of mobility)」を設定する。彼らが国際移動によってまず直面したのは自己認識の揺らぎであった。しかしその揺らぎの根源は、彼らの先祖がかつて日本からブラジルへと移民した時まで遡ることができる。こうしたディアスポラの経験と改宗により高まった宗教的感受性は、揺らいだ自己認識を彼らがどう捉え直すかという過程において重要な要素となっている。この「移動の道徳性」を用いて、従来の研究が描き出そうとした民族や人種にもとづく自己認識ではなく、「神の国に属する者」として日系ブラジル人改宗者が自身を解釈し語る過程を明らかにした点に、本書の最大の特徴がある。

## II. 本書の概要

第1部は日本に移住した日系ブラジル人改宗者を取り巻く環境が説明されている。第1章では、彼らの移住が可能となったのは日本人移民の子孫とその配偶者に発給される「定住者」という査証が新設されたことによるものであったが、移住後は、そうした日本との「つながり」よりも彼らが既に文化的および／もしくは民族的にも多様な背景を持っていたことが重視され、日本社会からは「日本人」とはみなされなくなる。

しかしながら、彼らにとって移住はそもそも「帰還」を目指したものではなく、短・中期間での貯蓄を目的としたものであった。このような状況下では、国家や民族に関わる「起源」にもとづいた自己認識が揺り動かされることとなる。その中でペンテコステ派への改宗は宗教上の「起源」の語り方を学ぶ機会を彼らにもたらし、それによって彼らは、自分の「起源」の別の語り方をも得た。聖書から、キリストの磔刑と復活などの出来事と関連付けながら、人々の今のあり方、それがそうである「起源」を理解するようになったのである。

第2章では、彼らの自己認識の形成にも影響を及ぼす、ブラジルへの日本人移民史が整理される。日本人の集団移住を引き起こしたコーヒー農園での労働、そこから自営農としての独立、都市での就業を経て、子弟の社会上昇、日系人がブラジル社会で「モデルマイノリティ」までとなる過程がまとめられている。本章では日本人移民とその子孫を取り巻く宗教的環境の変遷についても整理されており、ブラジルでペンテコスタリズムは1970年代以降伸展するが、主として貧困層の間で信者が増加してきたこともあり、ブラジルの日系人の中での信者数は少ない。

にもかかわらず、ペンテコステ派の教会は日本のブラジル人コミュニティで信者を増やした。これは以下で述べるように、ブラジル社会で確立した「モデルマイノリティ」から一転して日本社会では「非熟練労働者」としてのまなざしを受け、この非熟練労働に携わる時間が生活のほとんどを占めるようになった彼らの心の支えを、教会が果たしているためである。

本書の第2部以降、インタビューの結果やインフォーマントとのやりとりがより多く再現され、それとともに池内の分析が展開されている。特に、「時間」

にかかわる感覚の変化が描きだされている。第3章では、デカセギという「住む」のではなく「働く」ための移住、くわえて日本では下降した階層帰属意識を回復させるために帰国を望む気持ちの未来志向は、「今を生きる」という感覚を彼らに喪失させた。

この感覚の喪失に加え、第4章では、「そこでもここでもない (nem lá nem cá)」、文化と文化の中間という位置が取り上げられる。「そこでもここでもない」という表現は、あるインフォーマントが、日本で生まれ育ったブラジル人や、ブラジル人集住地区に住み日本社会からも孤立しブラジルの「よい文化」を継承していないブラジル人に対して使ったものである。これをきっかけに、池内は日系ブラジル人が占める「位置」について、フィールドワークの結果およびメディアでの表象を分析することにより考察している。分析と考察にはいる前に池内はまず、明確に境界づけられる文化の存在を前提とする「ここ」と「そこ」という語りを批判する。その後、インフォーマントと池内の対話において、こうした「ここ」の「日本」と「そこ」の「ブラジル」が具体的に現れる過程を示し、それらが生来的固有のものとする、いわば「人種化」された形で現れており、それによって文化と文化の間という感情や理解が生じていることを指摘する。

「ここ」と「そこ」は、「家族の危機」という問題においても如実に現れる。日本へのデカセギが始まった当初は男性単身での移住が多かったこともあり、それ以来常に、ブラジル人の間では、孤独感が強まり、家族同士の絆の弱体化が起こった。こうした家族の危機もまた、「日本」と「ブラジル」の対比により理解がなされる。具体的には、家族が団結していて理想とされる「日本人」ではなく、「ブラジル人」の家族の危機として捉えられるのである。

続く、第3部のタイトルは「回復」となっている。ここまで「喪失」としてあげられた、「今を生きる」という感覚が改宗した信者には違う様相をもちはじめ、デカセギのブラジル人が「今、ここ (right now, right here)」を生きられるようになる様子がこの部の最初の第5章で描かれている。

信者が日々従事している仕事は実際には神の計画の下で果たしている仕事なのであるという教えは、経済的ではなく精神的な面において自己認識を行うこ

とを可能とした。それにより、デカセギという目的によって重視するようになった未来から「今、ここ」へと立ち戻る方法を、彼らはみつけたのである。これに伴いさらに、経済面で近代化された日本では失われた、精神的な進歩としての「近代性」を改宗者は感じるようになった、と池内は指摘する。「今、ここ」へと立ち戻るのは、礼拝に出る、聖書を読む、祈る、という具体的な行為を通じて可能となり、時間は彼らにとって規則的に過ぎていくものではなく柔軟性をもつものとなる。

「回復」すべき家族関係に関わる感情として第6章において取り上げられるのは、「愛」である。「愛」はキリスト教文化で重要な感情である。この章は池内が参与観察した、配偶者を対象とした教会の活動の描写から始まっている。長老が聖書にある「愛さない者は神を知らない。神は愛である」を読み、配偶者間の愛、それが家族を築き、愛は神の国を築く礎となる、と説く。

「愛」は、国籍を問わずペンテコステ派の信者としての主体性の根幹をなす。配偶者間の関係は、親密性による結合であり、日本に伝統的にみられた見合いとは異なる、「近代性」を有したものと日系ブラジル人改宗者は捉えている。そして愛は、「日本」ではなく、「ブラジル」的な感情としても語られる。ここで再び現れる「日本」と「ブラジル」の対比は、「近代性」についての語り方を生み出し、日本人よりもすすんだ「近代性」を持つ主体としての自己認識を日系ブラジル人改宗者にもたらしているのである。

こうした「近代性」の一方、聖書にもとづいて、愛の永遠性、不変性、普遍の真実についても信者は語る。愛にまつわるこうした二つの時を相容れないものとしては捉えていないのである。二つの時は、女性の役割という、ジェンダーの問いにも関わってくる。池内は、女性たちを対象とした教会での活動にて女性牧師が、近代的な女性は経済的に自立してはいるがそれは個人の自己実現のためではなく、他者を支えるためであり、男性並に働くことではない、と説くのをきいた。配偶者たちを対象とした活動でも、男女お互いが補足しあう、と教えられる。これらは教会が支えてきた性役割を「遅れたもの」とする社会への反論でもあるが、これらによってペンテコステ派は別の形で女性にエージェンシーを与えていると、池内は指摘する。

日本に住むブラジル人が問題として捉えているのは、こうした性役割ではなく、第4章で既に取り上げられた、家族関係の希薄化である。そのため、女性が「男並みに働く」ことで変化してしまう前に、性役割を受け入れることが家族関係修復の策として考えられている。修復された家族関係は、日本人移民の家族がブラジルで維持してきた家族関係の秩序、教育、礼儀正しさと、キリスト教の愛と一致するブラジル人の愛情の豊かさ、双方を受け継ぐものとなる、と池内はいう。

これまでみてきたように、一見二項対立にもみえるものが日系ブラジル人改宗者の生活において意味を持ち始めることについて、続く第4部でも分析が続けられている。最初の第7章で注目されるのは、メタファーである「血」である。在留資格「定住者」の創設の根底にある血統主義が重視する「日本人の血」と、改宗者のアイデンティティと神の国に属するという帰属意識を生じさせる「キリストの血」によって、日系ブラジル人改宗者と人々との関係性が築かれていく過程が分析されている。

「日本人の血」は、デカセギブームを起こすこととなったメタファーであるが、移住先の日本では「日本人」とみなされずむしろ帰属意識を混乱させていくものとなった。一方、キリストの血は他の信者との精神的な関係性の構築を可能とした。

キリストの血は信仰を表明する洗礼式でも強調され、改宗者はキリストが流した血を通じて生まれ変わるとされる。この「生まれ変わり」は、池内によると、何度も生まれ変わるくらい、信者が身を投じていくもの、である。そのうえ、この血は世代によって「薄まる」ものではなく、日本で生まれ育っている子どもたちの間でも強められていくものである。

第8章では、一人の女性の改宗に焦点があてられている。教会が個人の選択としての改宗の重要性を教える中で、彼女の改宗は家族との関係の修復を願ったものであるため、望まれる改宗の姿には一見みえない。しかしながら、彼女のような例もまた、関係性の中に身を投じていく行為であり、それは信仰をなす一要素だと、池内は分析している。

「帰還」となづけられた第5部ではブラジルへの帰還ではなく、身体を通じ

て経験される現在への帰還、が議論される。ここで、彼らの身体を通じて実際に経験される異言が取り上げられている。人が日時を設定できる洗礼とは異なり、異言は精霊がそのときを決めて行う洗礼として理解されている。池内は、異言を自身ではコントロールできないがゆえに、信者は自分が常に神と共にあることを感じているという。

ペンテコステ派では儀礼ではなく、信者と神との対話が重視される。それは個人にエージェンシーを与えるが、個人はあくまでも、神聖なる他者である神と共にあることが強調される。それをまさに実感できるのが、身体を通じて経験される異言なのである。

最後の章である第10章はこれまでのまとめであるが、ここでようやく本書になぜ *Jesus Loves Japan* というタイトルがつけられたのかが明らかにされる。1999年に保見団地で日本の右翼と暴走族、ブラジル人住民との間で暴力的な衝突があったが、その際信者たちが団地内を歩く際に叫んだ言葉なのである。愛を語ることにより、キリスト教徒としての市民であることを主張した。この姿はモーセがエジプト軍に追われて荒野をすすんだことと重ね合わされ、このように古代と現代、これまで述べてきたように、「そこ」と「ここ」も溶解する中で、日系ブラジル人改宗者のアイデンティティは形成されるというのが池内の主張である。

### III. 語り方を得る信者と調査者

本書の第1章は一人の長老が在日ブラジル人の移住の経験を「巡礼」になぞらえて説教をはじめの場面から始まっている。これは本書が描きだすことを試みた、信者が語り方を得る、言い換えると、エージェンシーを発現させる過程であるためである。

この第1章に先立つプロローグは、池内がインフォーマントの一人から聖書を学ぶシーンで始まっている。プロテスタントの信者ではないことに加え、日本人であること、アメリカの大学で博士課程に在籍すること、家族には祖先崇拜があることなど、池内のポジションナリティが本書では明確に示されている。そのような彼女がインフォーマントとの関わりによって語り方を得ていく過程

は、ハラウェイがいう「状況に置かれた知」(Haraway 1991)を如実に示している。

語り方について、筆者も、在日ブラジル人を調査対象としたフィールドワークやインタビューで特定の語り方を耳にすることがある (Watarai 2021)。それらが、池内が本書で鮮やかに描き出したような信仰によって獲得した語りなのか、彼らの母国で歴史的に構築されたものなのか、判断が難しいことがある。その困難さもありながら、インフォーマントの語り方を生み出すコンテキストの分析の重要性を再提示したことも、本書に大きな意義を与えている。

#### IV. おわりに

信者が語り方を得て自身の経験を解釈する過程を如実に描き出した本書は、文化人類学や移民研究が議論するエージェンシーの問題と、研究者のポジヨナリティの問題に対して多くの示唆を与える。

しかしながら、エージェンシーに関して、その限界の検証を含めていれば本書の内容はより一層充実したと思われる。フェミニズムにおけるエージェンシーを考えるうえでバトラー (1999) は、言説実践の外側において行為体や現実の理解可能性はない、と主張している。聖書や牧師の教えは、日系ブラジル人改宗者に自身の経験の理解の方法を与える。そして、これらは、神の国に属する者としてのアイデンティティをパフォーマンス的なものとし、一層強化させる。だが、この実践の外での理解が難しくなっていることは、彼らのエージェンシーの限界と捉えることができないだろうか。さらに、バトラーが学術的な作業として提案する、理解不能とされていたものを記述し直すという点は、教会や信者の間で動きとしてみられるだろうか。池内も取り上げてはいるものの、教会側が理解不能を理解可能へとしていく例をより強調して記述することで、日本におけるペンテコスタリズムの伸展のダイナミズムをより伝えることができただろうと考える。

#### 引用文献

バトラー、ジュディス (1999) 『ジェンダー・トラブル フェミニズムとアイデンティ

『テイの攪乱』 竹村和子訳、青土社。

Haraway, Donna J. (1991). *Simians, Cyborgs, and Women: The Reinvention of Nature*, New York, Routledge.

Watarai, Tamaki (2021). Aprendendo a maquiar as hierarquias: corpo “ocidental” e o “oriental” nos cursos de maquiagem da comunidade brasileira no Japão. *Cadernos Pagu*, 63, <https://doi.org/10.1590/18094449202100630003>